

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

データと情報 (1)

前号のタイトル「どれどれシラミ」は判っていただけたでしょうか。判らない人に二通りあることがわかりました。ひとつは「シラミ=虱」という意味が理解できなかったタイプで、戦後50年以上もたって現物の虱を見ることが探すことも無くなった今、無理からぬことです。衣類や頭髮をかき分けて虱を探したあの文化はもはや想像することすら不可能になっていたのですから。よほど目を凝らしてみないと見えないシラミを「どれどれ」とか「どらどら」「そらそら」などいいながら探したわけです。

この日常(非日常?)会話の言葉とドレミが対応していることがわからない若者が増えてきたこともあります。ハ調以外の調ではドレミが対応できない(移調できない)若者がもうひとつのタイプです。

同様に「みそラーメン」の場合「ミソラーメン」というようにミとソとラが実際のピッチと一致していたわけで、メロディーさえ覚えればいつでもこの「みそラーメン」というフレーズが出てくる純日本のコマーシャルの名作だったのです。最近二番煎じで「みそらしーみそ」「どれ」という類のものがTVで流れていますがメロディーに無理があるためコマーシャルとしては駄作だと思います。

このようにドレミは深層心理が影響する大切なスキーマなのです。何故深層心理にまで及ぶのかはもうお気づきとは思いますが、「ミソ」が「ミソ」と聞こえる間はただのデータに過ぎませんが、それが「味噌」と感じられたらそれは情報に変わったということです。

このように「音名はデータ」「階名は情報」という風に考えることができます。情報化時代が叫ばれていますが、「情報」と「データ」がごっちゃになっています。

例えば試験の成績は点数表現ではデータ、5段階評定では情報。85・52・90はデータ、それをグラマーと呼べば情報。気温が10度、湿度が70%、気圧が900ヘクトパスカルというのはデータ。これを「風が強くて天気の良い寒い日」といえば情報。売り上げの金額と必要経費が並べて書いてあればデータ。引き算した結果がマイナスの場合赤字という情報。

このように例を挙げればきりがありませんが、情報化社会等といいながら数字のデータだけが一人歩きしているのがこの国の現状で、多くの人がそのデータを情報に変換するのは新聞や報道だけにまかせて自分では判断ができていないのではないのでしょうか。

成功した経営者はデータを情報に変換する能力が優れ

ているからそう呼ばれるのと同様、優れた音楽家は楽譜や音のデータを音楽情報にうまく変換できるからそう呼ばれるのです。楽譜通りを演奏するのはコンピュータにも可能であり、それを人間の文化的所産とは言いません。

SMLの音楽教育の基本的概念はこの混同や混迷をキッチリすることから始めます。即ち「**Sはデータに関する感覚や技能**」「**Mは情報に関する感性**」「**Lは情動に関する感受性**」という風に定義しています。

音楽における「S即ちデータに関する感覚や技能」は絶対音感の有無に関係なく正確に音の高さ長さ強さ音色を感じることです。複数の音の関係、即ち調性やテンポ、リズム、和音や機能と声などは単なるデータではなく音楽的要素としての「情報」を含みますので「M即ち情報に関する感性」という言い換えれば情報処理のスキーマを必要とします。そして、最終的には「心」が関わる「L即ち情動活動を喚起する心理」を起こさせることが大切なのです。

「ドミソ」はただのデータですが、それを「Iの和音」とか「主和音」という情報に変換しなければ音楽の意味は失われてしまうのです。ましてこれを「Cのコード」とするのはデータを別のデータに置き換えた(コーディングした)だけで音楽的情報とは何の関係もないどころか一層偏ったデータになってしまう恐れもあります。つまり、Cのコードは主和音でもなければIの和音でもない(ハ長調以外では)ということも考えずに和声を考えてしまう人が実際にできてしまうからです。ある曲のある瞬間Cのコードが鳴っていることは十分にあり得るのです。ただそれを「IとかIVとかVの和音」として聞けるかどうかで次の段階の音楽的意味享受である「情動喚起」が変わってくるのです。言い換えれば、作曲者や演奏家の意図が伝わらないただの「音響デザイン」になってしまうのです。

携帯電話の着メロをオリジナルメロディーにするのが若者の間に流行しています。この着メロは①テンポ②ピッチ③デュレーション(音長)の設定だけで自分の携帯だけの着信音が持てるのです。携帯を持つ青年層はこの着メロを入力するのに、下書きをするのと直接入力するのと、カンニングブックを見る等の方法を選びます。最近では着メロのデータブックが書店でもよく売れていますが、本に頼らず自力でやるのは私の大学ではごく少数です。その彼らの行動が何を意味するのかということから、ハイテクと音楽教育の本論を今年からスタートします。